

【第2回日韓学生フォーラムハンドアウト】



2017年度日本語教育実習
お茶の水女子大学・京都市立大学


**シティズンシップ教育としての
複言語・複文化プログラム分析**

Shin Moriyama (Ochanomizu University)
moriyama.shin@ocha.ac.jp

2

釜山外大 vs. お茶大

- 2007～ TV会議システムによる国際合同授業開始
(当時『国際新聞』に掲載)
- 2009～ 多言語・多文化サイバーコンソーシアム
- 2012～ 国際学生フォーラム
- 2015.12 国際学生フォーラム
(in Korea)
- 2016.7 学術交流協定締結
- 2016～ 複言語・複文化プログラム



第5回 国際学生フォーラム

3

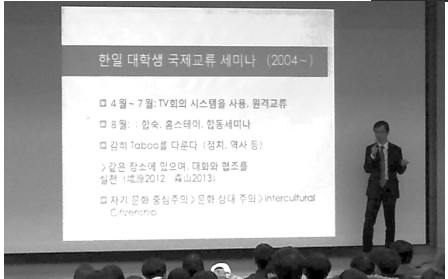
釜山外大がなぜ魅力的か？

- 日韓をつないできた釜山にある
- 日本語教育が世界一さかんな大学
- 鄭起永総長のビジョン
- アジア共同体研究所とアジア共同体論
- CEFRに基づいた日本語教育
- 複言語・複文化プログラムが可能



4

アジア共同体論




한일 대학생 국제교류 세미나 (2004～)

- 4월～7월: TV회의 시스템을 사용, 원격교류
- 8월: 1. 합숙, 캠퍼스 투어, 합동 세미나
- 강의 Taboo를 다룬다 (정치, 역사 등)
- ▷ 같은 장소에 있으며, 대화와 협조를 실천 (2009.12 ~ 2013.12)
- 차기 문화 중심주의 > 문화 상대주의 > intercultural Chemistry

5

釜山外大と共に行いたいこと

- 過去を乗り越え、韓日、そして東アジアを共生に導くパートナーとなる
- 東アジアが共に生きるための言語教育を考える



～複言語・複文化教育と東アジア共生の可能性～

釜山外大国際交流センター

6

1. はじめに

- 東アジアにはEUのような、ともに生きるための地域連合体がなく、それをめざすための教育理念や教育政策も存在しない
- 各国首脳の政策・談話：国家間の対立を政治によって解決できるという実感も感じられない
- 日韓、東アジアがともに生きることをめざし、2016年度から「複言語・複文化プログラム」を立ち上げた
- 本研究：その内容について紹介＞ 成果と残された課題

2. 先行研究 ～ヨーロッパ～

Byram (2008) :

- 国語教育：ナショナル・アイデンティティ（第二次社会化）
 - 外国語教育：ナショナルな視点を脱中心化・相対化＞超国家的なアイデンティティ構築＞超国家・文化的シティズンシップ（第三次社会化）
- 言語能力＋文化教育＋政治教育

2. 先行研究 ～ヨーロッパ～

- Byramの主張が正しいとすれば、新たな形態の外国語教育の推進は、東アジア諸国がともに生きるために必要な、超国家的なアイデンティティやシティズンシップの構築に寄与
 - Byram, et al. (2016) などを実証的な研究事例がある
- しかし、
- 十分とは言い難い
 - そのまま東アジアにも応用可能であるといえる保証もない

2. 先行研究 ～東アジア～

- 「ともに生きる」ための外国語教育実践：

森山の一連の教育実践、九州大学の日韓海峡圏カレッジ、アジア太平洋カレッジなど

- 研究：

森山（2016）など少なく、ほとんどが実践報告の次元
＞その成果を客観的、実証的に提示したり、東アジアがともに生きるための言語教育政策の基礎研究としたりするには限界

2. 先行研究 森山の実践活動一覧

- 日韓大学生国際交流セミナー（日韓、2004年～）
- 国際学生フォーラム（8か国、2012年～）
- サイバー・コンソーシアム結成と国際共同授業（8か国、2007年～）
- 豪・米・独における日本語教育実習（2012年～）
- 韓国における複言語・複文化教育プログラム（日韓、2016年～）
- 東アジアの共生を旨とする日韓学生フォーラム（日韓、2017年～）
- 北米地域との青少年交流事業（日米、2014年）

*各報告書は<http://www.ii.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/>で公開

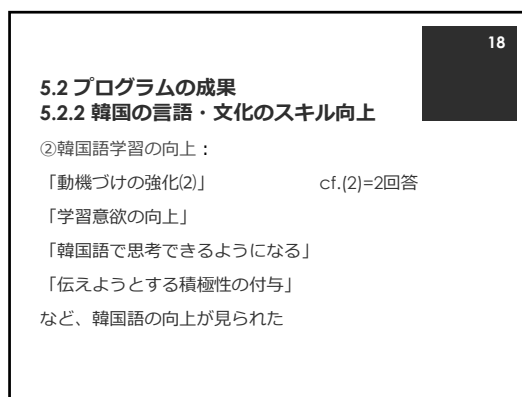
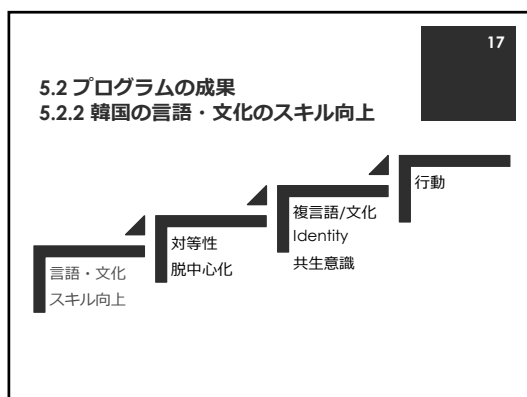
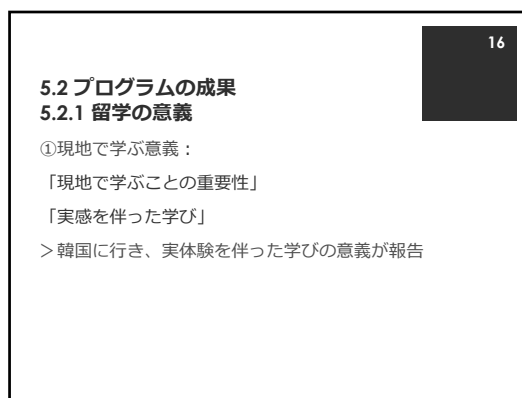
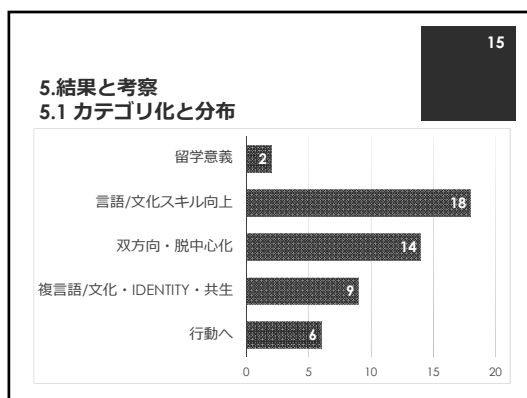
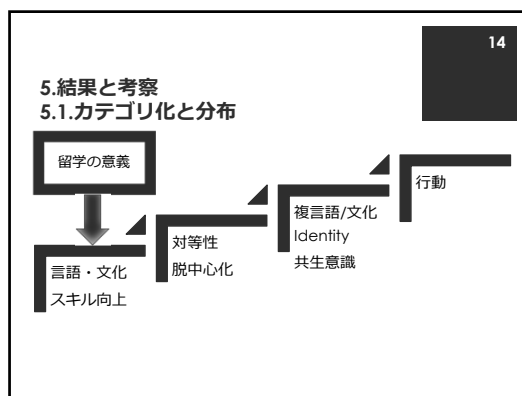
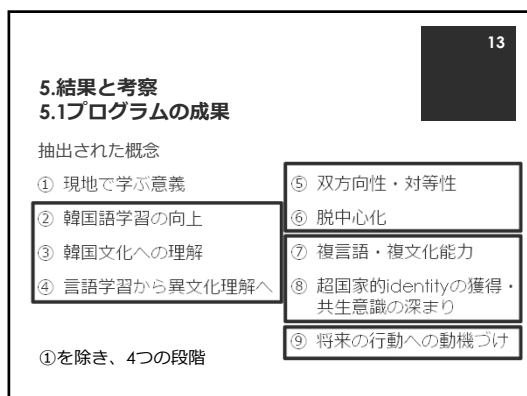
3. 複言語・複文化プログラム概要

- 2017年8月7日～9月16日、釜山外大で実施
- 参加学生：8名
- 韓国語・文化研修＋日本語教育実習
- 事前学習：
 - (1) 複言語・複文化主義
 - (2) Intercultural citizenship教育としての外国語教育
 - (3) ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）

4. 研究方法

- データ収集：プログラム終了後、レポートを提出
 - ① 韓国のことばと文化を学んで
 - ② 日本語教育実習
 - ③ 複言語・複文化教育プログラムについて etc.
- 分析方法：
 - ① SCATなどを用いた質的分析
 - ② Byram, Barnettの枠組みでの成果の考察





19

5.2 プログラムの成果

5.2.2 韓国の言語・文化のスキル向上

③韓国文化への理解：

「差異の気づき(2)」

- > 「異文化を受容することの困難性」
- > 「ステレオタイプの打破」「負のイメージ払拭」
- > 「魅力の実感」「親近感の増進」
- 「親睦の深化」「相互理解の深化(2)」
- > 気づき・困難・克服を経て理解へ

20

5.2 プログラムの成果

5.2.2 韓国の言語・文化のスキル向上

④言語学習から異文化理解へ：

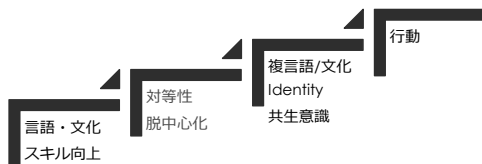
「言語学習から異文化理解への正の影響」

- > 言語を学ぶことで文化理解が深まった

21

5.2 プログラムの成果

5.2.3 対等性・脱中心化



22

5.2 プログラムの成果

5.2.3 対等性・脱中心化

⑤双方向性・対等性：

「双方向的姿勢の堅持」

「言語学習の双方向性」

「双方向の交流により言語教育に対する認識の変化」

「教師から学生への一方向からともに学ぶ教育へ」

- > プログラムの双方向性、対等性は「脱中心化」を促進

23

5.2 プログラムの成果

5.2.3 対等性・脱中心化

⑥脱中心化：

「自文化の客体化」

「自他文化を客観的に見つめる視点」

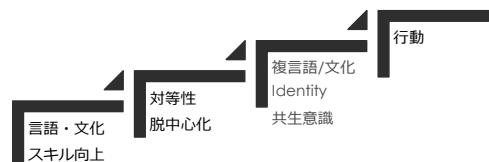
「視点の多様性の認識(2)」

- > 自文化を脱中心化、客体化、自他の文化をクリティカルに見つめる

24

5.2 プログラムの成果

5.2.4 複言語/文化・Identity・共生意識



25

5.2プログラムの成果

5.2.4複言語/文化・Identity・共生意識

- ⑦複言語・複文化能力：単にスキルの問題ではなく意識変化
- 「複言語・複文化能力の向上」
- 「複言語・複文化環境の重要性の実感」
- 「複言語・複文化主義を体験」
- 「複文化についての達成感」

26

5.2プログラムの成果

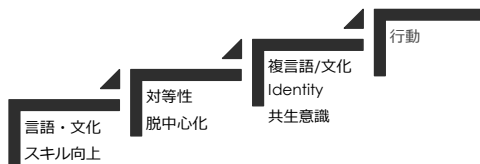
5.2.4複言語/文化・Identity・共生意識

- ⑧超国家的アイデンティティの獲得・共生意識の深化：
 - 「超国家的アイデンティティの獲得」
 - 「東アジア人としてのアイデンティティ構築」
 - 「心理的距離の縮まり」
 - 「ともに生きたいという思い増加」
- > 超国家的identity構築、共生意識が芽生え、深化

27

5.2プログラムの成果

5.2.5 行動へ



28

5.2プログラムの成果

5.2.5 行動へ

- ⑨将来の行動への動機づけ：
 - こうした自己意識の変化は、将来の行動へと発展
 - 「架け橋としての行動の動機づけ付与」
 - 「交流促進行動の開始(3)」
 - 「関係改善の行動への着手」
 - 「日本語教師の魅力の実感」

29

5.3 残された課題

5.3.1 自分自身に対する課題

- 「韓国に対する理解不足」
- 「韓国語使用に対する積極性の不足」

30

5.3 残された課題

5.3.2 プログラムに対する課題

- 言語教育プログラムに対してする課題：
 - 「日韓の言語的対等性の欠如」
 - 「韓国語の言語使用の機会の欠如」
 - 「韓国語プログラムと日本語教育実習プログラムの一体性の弱さ」
- シティズンシップ教育（政治教育）プログラムに対する課題：
 - 「日韓関係の難しさの再認識」
 - 「共生を考える場・時間の不足」
 - 「反日・嫌韓学生を巻き込んだ交流の必要性(4)」

6.シティズンシップ教育としての日本語教育へ

Byram et al.(eds.) (2016)
From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship

31

- Byram (2008) : 文化を超えたシティズンシップ教育
 - Pre-political Level (2段階)
 - (1)他者と関わる>「当然」をクリティカルに見つめ直す
 - (2)+代案・変化について提案・想像
 - Political Level (3段階)
 - (3)+自身の社会で変化を起こすために行動する
 - (4)+他者ととも超国家的共同体を建設する
 - (5)+超国家的共同体として共通の課題明確化

6.シティズンシップ教育としての日本語教育へ

Byram et al.(eds.) (2016)
From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship

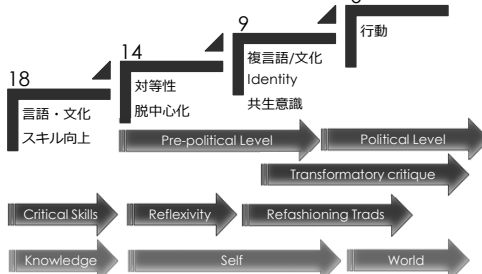
32

- Barnett (1997) グローバリ社会に求められるCritical beingとなるためのCriticality
- 3領域 x 4段階
- Knowledge : Critical reason
- Self : Critical self-reflection
- World : Critical action

Transformatory critique
Refashioning of Traditions
Reflexivity
Critical Skills

6.Citizenship教育としての日本語教育へ

33



6.Citizenship教育としての日本語教育へ

34

- Byram
 - Pre-political Level : 他者と関わり、(1)クリティカルに考え、(2)代替を模索・提案する
 - > 概ね達成
 - Political Level : 他者と関わり、(3)自分の社会で行動、(4)国を越えて共生、(5)共通の課題の明確化
 - > 十分とは言えず
 - 語学研修+教育実習であったため
 - > しかし、未来における着想>実際に行動に至る事例も

6.Citizenship教育としての日本語教育へ

35

	Knowledge	Self	World
(4)Transformatory Critique	○	?	??
(3)Refashioning of Traditions	○	○	?
(2)Reflexivity	○	○	○
(1)Critical Skills	○	○	○

* 但し、何人かは明らかにその後の人生設計に影響及ぼす

7.おわりに 複言語・複文化プログラムについての評価

36

- 複文化的側面：概ね「達成できた」
- 複言語的側面：「韓国語使用場面の不足(2)」>不十分
- Citizenship教育（政治教育）の側面：「日韓学生フォーラム」を実施したものの、日常生活でタブーとされる問題について扱われる場面は少なく課題を残した
- > 全員をして「超国家的アイデンティティの構築」「東アジア人としての自覚」「共生意識の芽生え」「政治的行動の段階」「Criticalityの創造的段階」に至らなかった原因か
- > これらが克服されていけば、東アジアがともに生きるためのシティズンシップ教育、共同体建設の土台となる、言語教育プログラムとなりうる?

◀参考文献▶

- Barnett, R. (1997). *Higher education: A critical business*. McGraw-Hill Education (UK).
- Byram, M. (2008). *From Foreign Language Education to Education for International Citizenship*. Multilingual Matters.
- Byram, M., Golubeva, I. Hui, H. and Wagner, M. (eds.) (2016). *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship*. Multilingual Matters.
- 森山新 (2016) 「第15章 シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育」『第二言語としての日本語習得研究の展望：第二言語から多言語へ』ココ出版

Table 8.1 Levels, domains and forms of critical being

Levels of criticality	Domains		
	Knowledge	Self	World
4. Transformatory critique	Knowledge critique	Reconstruction of self	Critique-in-action (collective reconstruction of world)
3. Refashioning of traditions	Critical thought (malleable traditions of thought)	Development of self within traditions	Mutual understanding and development of traditions
2. Reflexivity	Critical thinking (reflection on one's understanding)	Self-reflection (reflection on one's own projects)	Reflective practice ('metacompetence', 'adaptability', 'flexibility')
1. Critical skills	Discipline-specific critical thinking skills	Self-monitoring to given standards and norms	Problem-solving (means-end instrumentalism)
Forms of criticality	Critical reason	Critical self-reflection	Critical action